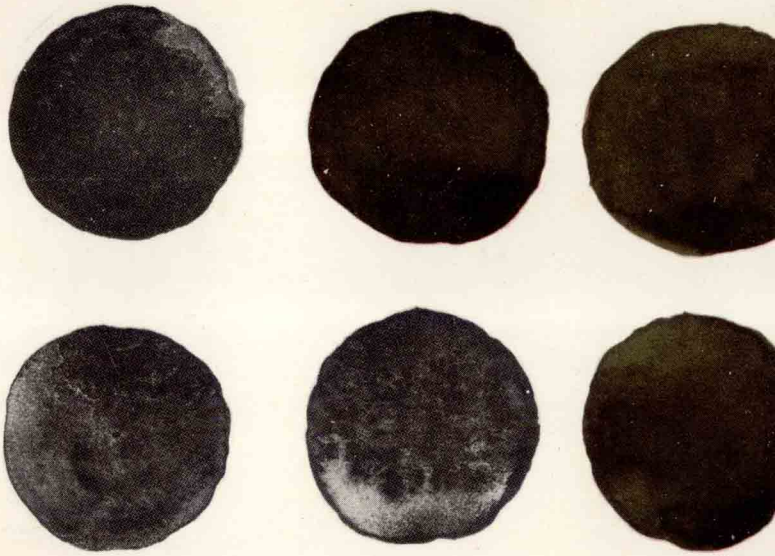
新しい世界の文学



犠牲者

ソール・ベロウ
大橋吉之輔・後藤昭次訳

白水社

犧
牲
者

Saul Bellow
The Victim
The Vanguard Press Inc., 1947

わが友、パオロ・ミラノに

こんな話があるのですよ、幸運な王さま。あるところに大変なお金持ちで、ほうぼうの町で仕事をしているたいそう立派な商人がおりました。ある日のこと、馬にまたがって町に集金に出かけたのですが、暑さのために疲れきってしまいました。それで木かげに腰をおろし、鞍袋に手を入れて中からパンとナツメヤシを取り出して、朝食をたべはじめました。ナツメヤシを食べおわると、その種を力いっぱい投げすてました。するとどうでしょう！　イフリットという頑丈な体つきの男があらわれて、抜身の剣をふりかざしながら商人に近よって、こういったのです。「さあこい、おまえがわしの息子を殺したように、わしもおまえを殺してやる！」商人はたずねました。「わしがどうしてあなたの息子を殺したなどと？」するとイフリットは答えました。「おまえがナツメヤシを食べてその種を投げすてたとき、ちょうど通りかかったわしの息子の胸もとにあたって、息子は即死したのだ。」

『千一夜物語』の「商人と悪魔の話」

それはとにかくとして、いまや逆巻く大洋の波間に人間の顔があらわれはじめた。海面は、あおむけになった無数の顔をしきつめたようであった。哀願する顔、怒りたけった顔、絶望した顔。波間に湧き立つ何千、何万、何世代の人の顔、顔、顔……

ド・クインシー『阿片のくるしみ』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

犠牲者

ソール・ベロウ
大橋吉之輔・後藤昭次訳

白水社

新しい世界の文学

1

ニューヨークではバンコックと同じくらい暑い夜がある。大陸全土が移動して赤道に近づき、灰色にくすんだ大西洋が熱帯の緑の海にかわり、町に群がる人びとは、未開のエジプト人たちが、神秘をひめた巨大な遺跡にたむろしているかのように見え、まばゆいばかりの町の灯は空の熱気に向かって果てしなくのぼっていく。

そんな夜、エイサ・レヴァンサルはあわてて三番アヴェニュー高架線の電車をおりた。もの思いにふけっていたので、乗り越しそうになったのだった。あやういところで気がつくと、飛びあがって車掌に向かって叫んだ。「おい、待ってくれ、ちょっと待って！」古ぼけた車輛の黒いドアはしまりかけていた。すき間に肩を押しこんでこじあけ、やっとの思いでそとに出た。電車はすべり出した。レヴァンサルははげしい息づかいをしながら電車をにらんで悪態をつき、それからくびすを返して階段をおりて通りに出た。

彼はひどく腹が立っていた。その日の午後はスタトン・アイランドの義妹、つまり弟の妻といっしょにすごした。というよりはむしろ、彼女のために午後の時間をつぶしてしまった。昼の食事を終わって間もなく彼女は会社に電話をかけてきて――彼は南マンハッタンの小さな商業雑誌の編集をしていた――きてください、すぐにきてください、とおろおろ声でたのんだ。子供の一人が病気になったのだ。

「エリナ」と彼は先方の声がとぎれたすきをみていった。「いまいそがしいんだよ。おちついて話してくれるといいんだが。ほんとうに重態なの？」

「すぐにきて！　エイサ、おねがい！　すぐにね！」

金切り声をふせぐような格好で彼は耳をおさえ、どうもイタリア人は興奮しやすくてこまるというようなことをぶつぶついった。電話は切れた。またかかってくるにちがいないと思いながら受話器をおいたが、電話は鳴らなかった。こちらから電話をかけるすべはなかった。弟の名前はスタトン・アイランドの電話帳にのっていなかった。エリナはどこかの店か近所の家から電話をかけてきたのだ。いままでながいことレヴァンサルは弟の家族とほとんどつきあっていなかった。ほんの二、三週間まえに弟からガルヴェストン（テキサス州の都市）の消し印のある便りがきた。弟は造船所で働いていた。そのときレヴァンサルは妻にいったものだ。「はじめはノーファック（ヴァージニア州の都市）だったが、いまはテキサス州だ。どこだって自分のうちよりはいいんだろう。」よくあることだ。マックスは結婚したのが早かったから、そろそろ何か目新しい冒険をもとめているのだろう。ブルックリンやジャージーにだって造船所はあるし、仕事もたくさんあるのに。それで、エリナのほうはひとりで息子たちの面倒を見るのに追われている。

レヴァンサルが義妹にいったことはうそではなかった。彼はいそがしかった。まだ見てない校正刷りが目のまえに山のようにたまっていた。しばらく待ってから電話のそばをはなれ、不快そうに咳ばらいをして一枚の書類を手にとった。たしかに子供は病気になったのだ、重態なのかもしれない、そうでなければあんな話しかたはしないはずだ。弟が留守なのだから、やはりおれが行ってやるのがつとめというものだ。夕方行ってみよう。そう緊急を要することではあるまい。エリナはどんなことでもおちついては話せないたちなのだ。彼は何度も自分にそういいきかせた。しかし、彼女の叫び声は耳もとで鳴りつづけ、台を高くのばした扇風機のにぶい音やタイプライターの音にまじって聞こえていた。ほんとうに重態だったらどうしよう？　ふいに、衝動的に、しかし一方ではそんなに衝動的になってはいけないと思いながら、彼は立ちあがり、椅子の背から上着をとって、交換嬢のところに行って、こういった。「編集長に用があるんだ。そう伝えてくれたまえ。」

レヴァンサルは両手をズボンの尻のポケットにつっこみ、編集長の机に体を押しつけて、いくぶん前かがみになり、出かけなければならないのです、と静かにいっ

た。

ビアド氏の頭ははげあがって、そのために顔の面積がひろがり、鼻は骨ばってとがり、額には青すじがたっていた。その顔が疑い深そうにけわしくなった。

「発刊の準備がまだできていないのにか？」と彼はいった。

「身うちに急用ができたんです」とレヴァンサルはいった。

「二、三時間あとにしたらどうだい？」

「そのくらいなら出かけはしません。」

ビアド氏は、ひとこと、いやみな返事をしただけだった。彼は金属製の定規を、タイプでうった本のページにぴしゃっとたたきつけた。「きみの思うとおりにするがいい」と彼はいった。それで終わりのようだったが、レヴァンサルは机のそばをはなれないで次の言葉を待った。ビアド氏はよごれた額をふるえる手でおさえ、無言で本を読んでいた。

「くそおやじめ！」とレヴァンサルは心の中でいった。

玄関のドアのところまでくると、そとは雷雨になった。彼はしばらくそれを見ていた。外気は急速にソーダ水の壜のように青色をおびてきた。町かどの倉庫の窓のない壁に、黒い縞模様ができて、雨に洗われた歩道の敷石やコールタールの継ぎ目が、そりのついた路面で光った。レヴァンサルはレインコートを取りに部屋にもどった。廊下を歩いていくと、ビアド氏の例のロやかましいこごとが聞こえた、「何もかもほうりだしたままで出かけおる。ピンチの最中だ。みんなが迷惑する。」

営業部長のフェイ氏の声らしいのが答えた。「あの男がひょいと出ていくなんておかしいですよ。何かあったにちがいありません。」

「自分だけとくをしておるんだ」とビアド氏はつづけた。「ほかの連中もそうだ。まともなやつはひとりもおらん。いつもまず自分がよければいい。あとでもどってきますぐらい、いったらどうだ？」

フェイ氏は何もいわなかった。

レヴァンサルは顔色ひとつ変えずにレインコートをきた。腕が袖にひっかかったが、むりにぐいととおした。もちまえの大股でのそっとした足どりで部屋を出ると、控え室によってガラスのウォーター・クーラーで水を飲んだ。エレヴェーターを待っているとき、まだ紙コップ

を手にもっていることに気がついた。握りつぶすと、格子戸のすき間からエレヴェーターの通る穴のなかへ思い切り投げこんだ。

船着き場まではたいして遠くなかったので、レヴァンサルは地下鉄の中でもゴムのコートを脱がなかった。湿気がひどくて、むしあつかった。顔が汗ばんできた。扇風機の羽は黄色味をおびたうす暗い光をうけてまわっていたが、回転数がかぞえられるくらいのろのろしていた。通りに出ると、雨はあがっていた。そして、船が船着き場からかるいうねりのある水面にすべり出したときには太陽がふたたび照りはじめた。レヴァンサルはデッキに立って、コートを肩にかけ、片手でそれをおさえた。港内に停泊中のペンキを塗りたての船や錆びた船がゆっくりと上下に動いていた。雨は遠く地平線のほうに去り、かすかに見える岸辺が黒い帯におおわれていた。水のうえは涼しかったが、スタトン・アイランドにつくと、よごれた緑色の大きな倉庫がうっとうしく、セメントの肌がまだらに日光を反射していた。船をおりた人たちの群れはそのあいだを通っていった。かげろうのゆらめいている歩道のそばで、バスの列がエンジンをかけたまま待っていた。

マックスは大きなアパートに住んでいた。アーヴィング・プレイスにあるレヴァンサルの部屋と同じく何階も階段を歩いてのぼらなければならなかった。子供たちが玄関でうるさくかけずりまわっていた。壁は子供たちの落書でいっぱいだった。兵隊帽をかぶった黒人の掃除夫が階段を洗っていて、レヴァンサルが靴あとをつけると、むっとしたようだった。庭先では洗濯ものが強い日ざしに黄色をにじませて大きくゆれていた。滑車がぎいぎいと鳴っていた。レヴァンサルがベルを押してもエリナは出てこなかった。ノックすると、年上のほうの甥がドアをあけた。その子は彼を知らなかった。もちろん、それが当然だ、とレヴァンサルは思った。子供は未知の男を見あげ、手をかざして、がらんとしたほこりだらけの白い廊下にさしこむ日光をさえぎった。子供のうしろに見える部屋は暗かった。日よけがおりていて、食堂のテーブルの上のごたごたの中で、電気スタンドに明りがついていた。

「お母さんはどこかへ出かけたのかい？」

「うちにいるよ。だれ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「きみの伯父さんだよ」とレヴァンサルはいった。戸口の中にはいると、彼は子供を押しのけるような格好になってしまった。

義妹があわてて台所からやってきた。彼女は以前と変わっていた。このまえ会ったときよりふとっていた。

「やあ、エリナ」と彼はいった。

「まあ、エイサ、いらしてくださったのね。」彼女は握手をもとめた。

「うん、きたよ。きみがたのんだじゃないか。」

「もう一度電話したんですけど、お出になったあとだったの。」

「二度目はなんだったんだい？」

「フィリー、伯父さんのコートをとって」とエリナはいった。

「ベルはこわれてるのかい？」

「赤ちゃんがいるからはずしてあるの。」

レヴァンサルはレインコートを子供にわたし、エリナについて食堂にはいった。彼女は椅子の上を片づけて、彼にすすめた。

「まあ、この部屋を見てちょうだい」と彼女はいった。「お掃除するひまもない。何をしてもさっぱり気持が集中しないの。カーテンをはずしてから三週間もたつっていうのに、まだそのままになっているのよ。それにあたしの格好も、ほら。」椅子の上から取りあげた衣類を下におろして、両手をひろげるしぐさをしてみせた。黒い髪はばさばさで、ねまきの上に木綿の服を重ね着し、足は素足のままだった。彼女は悲しそうにほほえんだ。レヴァンサルは例によって平然として、ただうなずくだけだった。彼女の目は不安そうで、あまりにも明るく、きらきらとうるんでいて、動作は過度に活発だった。それを見ていると、注意力散漫というか、あるいはほんものの狂気があらわれているのではないかと思われた。しかしそれは、そのような兆候に彼が敏感でありすぎるせいなのかもしれなかった。彼は自分でもそれがわかっていたので、早まった結論をくだしてはいけないと自分にいきかせた。彼はもう一度彼女を見た。かつては血色がよく浅黒かった顔が、今はやわらかで、ふっくらして、青白く、すこし黄色味をおびていた。甥のほうへちらりと目をやると、以前の彼女の姿が思いうかんだ。甥は母親にとてもよく似ていた。ただかすかに外側に曲がって

いる鼻だけがレヴァンサル系のものだった。
「ところで、どうしたんだい、エリナ？」
「ええ、ミッキーの具合がわるいの。ほんとにわるいの」とエリナはいった。
「病気はなんだい？」
「お医者さんはわからないっていうの。手がつけられないのよ。ずっとひどい熱がつづいているの。二週間ほど前からですけど。食べるものは受けつけないし。いろいろと手はつくしているの。どうしたらいいのかしら。今日はほんとにびっくりしたわ。部屋にいってみたら、あの子の息が聞こえないんですもの。」
「え、どういうことだい？」とレヴァンサルはいった。
「今いったとおりのことですわ。息が聞こえなかったんです」と彼女は力をいれていった。「呼吸してなかったんです。枕に頭をならべてみたの。なんの音も聞こえなかったわ。あたしはもう全身に寒気がしてきましたわ。死にそうな気持でしたの。それでお医者さんを呼びに駆け出したんです。ところが、お医者さんがいないんです。診療所だとかいろんなところへ電話をかけました。見つからないんです。それであなたに電話したんですの。帰ってみたらあの子は呼吸してましたわ。なんでもなかったんですね。それでもう一度電話しようとしたの。」
エリナは片手を胸もとにおいていた。長くてとがった指はよごれていた。その手の下になっているあたりの肌は白く、とてもなめらかだった。
やっぱりエリナのいった重態とはそんなものだ。おれもそのくらいのことは気がつけばよかったのだ。
「呼吸はずっとしてたんだよ」とレヴァンサルは少しあらあらしくいった。「一度とまったのに、また呼吸しだすなんてことはないだろう。」
「ちがうわ」と彼女はいいつづけた。「呼吸してなかったわ。」
レヴァンサルもまったくおちついていたのではなかった。少しは恐れもまじっていた。彼女から天井のすみへ目をうつして彼は考えた。「迷信もはなはだしい！　まるで古い田舎だ。死んだものがもう一度息を吹きかえすとかなんとか。」
「心臓に手をあててみればよかったのに」と彼は彼女にいった。

「そうね、たぶん……」
「あたりまえだよ。」
「いそがしかったんでしょう？」
「うん、仕事があって……」
彼女はいかにも申しわけなさそうだったので、彼はつとめて親切にしようと自分にいいきかせた。しかたがない。もともとこんなところにきたのがいけないのだ。ほんとうに今日の午後は仕事が待ちかまえていたんだ、と彼はエリナにいってやった。しかし、すでに会社には六年も勤めており、六年たっても一身上の都合で、二、三時間の暇もとれないのならやめてもいい。ひと月ぐらいぶっつづけに毎日午後さぼっても、いままで無償でしてきた超過勤務の時間数にはおよびもつかないのだ。口をとじても心は同じ話のすじを追いつづけた。これが役所勤めなら事情はちがう。病気休暇をとって、頭痛をかかえて家に帰る。それでくびになることもない……だが彼はこんなことをいつまでも考えているのはいやだった。彼は立ちあがって椅子の向きを変えた。位置を変えることによって考えの内容も変えようとしているようだった。

「日よけをあげればいいのに」と彼はエリナにいった。
「どうしておろしておくの？」
「そのほうが部屋が涼しいの。」
「風が通らないよ……それにスタンドをつけっぱなしにしておかなくちゃならない。電灯の熱で暑くなる。」
椅子の上にあった衣類を彼女はさっきテーブルにうつしたのだが、そのために皿や、パンや、ミルクや、雑誌が押しのけられた。日よけをおろしておくのは、このだらしないありさまを庭の向こうの部屋の人たちから見られないようにするためにちがいない、と彼は思った。部屋を見ると不快になった。そしてマックスはノーファックからガルヴェストンのどこかをふらついている。下宿かホテルで生活するほうがいいのだろう。
エリナはフィリップに一ドルわたしてビールを買いにいかせた。彼女は上着のポケットから金を出したが、そのポケットには小銭がいっぱいはいっていた。子供が行ってしまうとレヴァンサルはミッキーに会いたいといった。
うす暗くて暑くるしいエリナの部屋で、ミッキーは壁ぎわによせた大きなベッドに寝てうとうとしていた。上

掛けは腹までさげていた。短くて黒い髪の毛はじっとりしているようだった。口があいていた。袖なしの下着をきていた。レヴァンサルは手の甲をそっとミッキーの頬にあててみた。燃えるように熱かった。手をひくとき指輪がベッドの支柱にあたった。彼はエリナのまなざしにたじろいだ。思わずその手を弁解がましくあげながら、自分が赤面するのを感じた。だが彼女はもう彼のほうを見ていなかった。彼女は上掛けを子供の肩まで引きあげていた。レヴァンサルはそとに出て彼女を待った。彼女は気をつけてそっとドアをしめたので、しめきるのに数分もかかったような気がした。彼は部屋の中をじっと見つめた。簞笥のはしから半分ほど見えるベッドに寝ている子供のあたりはだいぶ暗くなっていた。やがて彼女がノッブから手をはなすと二人は食堂に帰った。

彼は腰をおろしたが、気持は暗くふさいでいた。ミッキーは入院させたほうがいいと彼はいきなりいい出した。「どんな医者にみてもらってるんだい?」と彼はいった。「家で治療させておくなんて、医者もどうかしている。ミッキーには病院が一番だよ。」だが、エリナと話していると、わるいのは医者ではなくてエリナだと彼はすぐにさとった。自分で世話してあげられるから家においておくほうがいいのだ、と彼女はいいはった。あまり病院をこわがるので彼はとうといってやった。「そんな田舎ものみたいなことをいってるときじゃない!」彼女は何もいわなかったが、叱られでもしたように気にしているふうだった。たぶん彼の気持などわかってはくれまい。彼はそんなにはげしいもののいいかたをする自分にいや気がさしたが、そこにあるものはどれも彼の気をめいらせるものばかりだった——この家も、義妹も、病気の子供も。こんなところで、あの部屋で、どうして病気がなおるものか。「ね、ほんとうだよ、エリナ」と彼は調子を変えていった。「病院なんてこわいこと何もないよ。」彼女は目をつぶって頭をふった。彼はもうひとことおいうとしたがやめて、モヘアの肘掛け椅子の背に体をそらした。

突然彼女は元気よく、楽しそうにいった。「フィリップがビールを買ってきたわ。」彼女はグラスを取りに立った。栓抜きをさがしたが、見つからなかったので、フィリップは台所の引き出しの鉄の取っ手で栓をこじあけた。エリナはサンドイッチをつくろうとしたが、レ

ヴァンサルは腹がすいてないといった。「あら、もうそろそろ夕食の時間よ。食べてらしてもお義姉さんにしかられないでしょ。お義姉さんお元気？　きれいなかたね。」エリナは気持よく笑った。彼女は彼の妻の名前も知らなかった。一度か二度会ったことがあるだけだった。彼はメーリイが二、三週間の予定で南部の母親のところへ出かけているとはいいかねた。いえば泊まっていけとすすめるかもしれなかった。

話題を変えるために彼は弟のことをたずねた。マックスは二月からガルヴェストンにいっていた。家族のものも呼びたいと思ったが、ひどく人の多いところでとても部屋がなかった。暇さえあれば部屋をさがしまわった。

「どうして部屋のあるニューヨークへ帰らないんだろう」とレヴァンサルはいった。

「そりゃあ、あっちのほうが収入が多いんですもの。週五、六十時間働いてるのよ。たくさん仕送りしてくれるわ。」マックスが留守だからといって、彼女はさびしそうでもないし、また、とりわけ気にしているふうもなかった。

彼はいそいでビールを飲みおわると立ちあがって、会社へ帰って一時間ほど仕事を片づけなくてはいけないといった。エリナは彼に隣家の電話番号を教えた。彼はそれを手帳に書きこむと、ミッキーがよくならなかったら一両日してまた電話してくれるようにいった。ドアのところでフィリップを呼んで、ソーダでも買いなさいといって二十五セント玉をやった。子供はそれをうけとって「ありがとう」と口ごもるようにいったが、ありがたいと思っているふうには見えなかった。二十五セントくらいではたいした額でなかったのだろう。エリナのポケットには小銭がいっぱいはいってる。それは彼女の自由に使える金にちがいない。レヴァンサルは少年の頬をなでてやった。フィリップは頭をたれた。どことなく気分が晴れず、自分自身にいや気をおぼえながらレヴァンサルは弟のアパートをあとにした。

バスの待ち時間がながかったので、マンハッタンについたときには暗くなりかけていた。会社に帰って仕事をするのにはおそすぎたが、それでも、暑くるしい暗がりのサウス・フェリー駅に立って、会社に帰ろうかと迷った。「なあに、一日ぐらいぼくがいなくても大丈夫だろう」と彼はとうとう心を決めた。もしいま彼が帰って

行ったら、自分がわるかったとビアドに認めるようなかたちになる。それに、自分だけはほかの連中とちがう人間になろうと努力しているように思われるかもしれない。よそう、そんなふりを見せるのはよそう、とレヴァンサルは思った。早目に食事をして家に帰ろう。空腹というよりは、のどがかわいていたが、やはり食べなくてはなるまい。彼は急に歩き出して電車のほうに向かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com